

#07 愛を知らなくて

「んっ…そろそろ…出てかないと…」

「ふう…はあ…」

「ん…」

「その…もう会うことも無いと思うし…」

「寝てるあんたに話しても、何も意味はないんだけどさ…」

「あんたに拾われて、良かったって、本当に…思ってる」

「私の家って、ひどくてさ」

「父親が浮気して、小さい頃に家出てって…それで母親もおかしくなってさ…」

「いつも私を怒ってばっかりで…何度も、叩いてきたり…ご飯がない日とかもあった…」

「それで…しばらくしたら、母親が新しい男を家に連れ込むようになって…」

「しかも、1人じゃないんだ…何人も、とつかえひつかえして…」

「そのうち、私なんかいないみたいに扱ってきてね…部屋で盛り合ってさ…」

「暴力を振るってくる男もいて…最悪だった…本当に」

「なんとかしたくて、他人を頼ってもさ…」

「皆はじめはいい人のフリして…近づいてきて…」

「皆決まって、やらしい事をさせろとか言ってくんの…」

「それで結局…誰も助けてくれないし…抵抗しても、乱暴されるだけだし…」

「本当…なんなのって感じだよね。誰も信じられないよ」

「結局、私の帰れる場所って…家しかなくてね…でも、やっぱり地獄でさ」

「母親が出かけてる時に、男の1人に襲われそうになって…」

「その時は、抵抗してる間に、母親が帰ってきたんだけど…」

「…母親は助けてくれるどころか、私を殴ってきたんだ」

「お前も、私の男を取る泥棒だ…とか言ってさ…」

「訳わかんないよね…本当」

「それで…もう、全部嫌になって…家を出て…どうしようかなって考えてたら…」

「あんたが声かけてきた」

「正直、またかって思ったよ。どうせいつもの男達と一緒にあって、思った」

「でも…違った」

「あんただけだったよ。何も見返りを求めなかつたの」

「正直、びっくりした…」

「おかげで人なんて信じられないと思ってたけど…

「あんたみたいなのもいるんだってわかって…なんかホッとしたんだよね」

「だから…ありがと…」

「あんたみたいなのは、私と関わらずにいたほうが…絶対、絶対…いい人生送れるだろうから…」

「これからも…んつ…元気で…」

「ん…ちゅつ…」

「んつ…っ…！　はあ…」

「…さよなら」

「…よし」

「え…っ!？」

「あ、あんた…起きてたの!？」